

実印を預けてしまったばかりに起きた悲劇

R.F.C

リスク・カウンセラー & ファイナンシャル・カウンセラー

Information & Report

2004.12.16 Vol.2004-12

利益が出てきたら 経営陣の内輪もめ

輸入雑貨販売業の社長A氏(45歳)は、9年前に元同僚のB氏(47歳)と二人で脱サラして会社を設立。設立当初に年上で資金的に余裕のあるB氏が社長に成る予定であったが、営業上がり沢山の顧客を持っているということでA氏が社長に就任した。

いくつもの障害を乗り越えB氏の縁故社員を含め社員が15名になっていた。これまでに、資金が足りないと自宅を担保に借入れをしたりしていたが、一方では資金を備蓄しながら増資をして事業の拡大をしてきた。利益が十分に上るようになってきた時B氏は役員報酬のアップを要求してきたが、A氏は断固として会社の体力を強くするための内部留保を主張した。

そのうち、気になる噂が流れ始めた。社長が利益を独り占めにしていくつもの障害を乗り越えB氏の縁故社員を含め社員が15名になっていた。これまでに、資金が足りないと自宅を担保に借入れをしたりしていたが、一方では資金を備蓄しながら増資をして事業の拡大をしてきた。利益が十分に上るようになってきた時B氏は役員報酬のアップを要求してきたが、A氏は断固として会社の体力を強くするための内部留保を主張した。

そんな頃、A社長は咳き込むことが多くなり風邪の症状を訴えて病院へ行った。あるうことが肺結核と診断され法定伝染病であることから有無を云われず即入院となった。会社も消毒、自宅も消毒だ。幸いにも近親者や取引先の人に迷惑をかけることもなく入院することで一段落した。およそ半年間に及ぶ入院拘束を宣告され、外部との接触を断たれることとなった。A氏が入院した当時、すでにB氏が専務として業務に就いていたので取引先との引き継ぎなどB氏に引き継ぎ、その間は大きなトラブルもなく業務は回っていると云う報告であった。



近くの公園に咲くヤツデの花は今が満開です。

と云わんばかり噂が社員を取引先に流布されているのだ。小さな会社なのに、いつしか社内にはB氏派とも云う取り巻きができていた。

社長が突然入院 長期入院中に実印を預ける

そんな頃、A社長は咳き込むことが多くなり風邪の症状を訴えて病院へ行った。あるうことが肺結核と診断され法定伝染病であることから有無を云われず即入院となった。会社も消毒、自宅も消毒だ。幸いにも近親者や取引先の人に迷惑をかけることもなく入院することで一段落した。およそ半年間に及ぶ入院拘束を宣告され、外部との接触を断たれることとなった。A氏が入院した当時、すでにB氏が専務として業務に就いていたので取引先との引き継ぎなどB氏に引き継ぎ、その間は大きなトラブルもなく業務は回っていると云う報告であった。

やがて出社して驚いた。自分を見る社員の目に異様な物を感じながら事務所にはいると、社内の雰囲気ばかりか机の配置も変わり、専務のB氏を「社長」と呼んでいるではないか。自分の机もない。B氏に問い質すと、売り上げ激減で資金繰りをクリアするのに借りた友人からの条件はB氏が社長じゃなければと云うことであつたし、こうしないと借入れができなかつたのだと。融資先が納得しなかつたのだと。株式会社A氏の持ち分の方

【ちよこ蔵時記】
いつの間にか、うっすらと雪化粧をした山並みの映像を目にする頃となった。仕事で東京郊外を走行していると目にとまるのが紅葉だ。春には淡いピンクの花が咲き乱れていた武蔵野の千川上水沿いの桜は、深紅の葉をつけ秋の気配を染みまてくれる。
日光や昇仙峡など東京郊外に紅葉の名所と云われる所があるが、東京都内のあちこちで紅葉が楽しめる。東京都内の樹に指定されている銀杏のある樹だ。道路沿いの銀杏はまばらに黄葉してきたが、木枯らしのコンダクターの出番を待つように静かに衣裳替えをはじめていく。神宮・絵画館前の銀杏並木に、黄色い妖精達の舞う姿が観られるのも、東京の秋の公演(公園)のすばらしさだろう。(細野)

そろそろ年末調整の時期だ。家族の異動や、生命保険料及び損害保険料の控除等で幾ら税金が戻ってくるか話題になる時だ。
生命保険料控除は①一般の生命保険料控除(最高、五万円)と②個人年金保険料控除(最高、五万円)があります。さらに、別途住民税が、最高、三万五千円が各々控除されます。
契約者がパソコンからプリントした用紙に必要事項を記入して申し込みをした際のうっかりミスが重なり、確定申告で「個人年金保険」の五万円の控除が受けられなくなつたのです。
本人は「個人年金保険」として申込みしたつもりでしたが、その原

因は「個人年金保険料税制の特約」の特約欄を見落としていたからなのです。
個人年金保険(一般口)で契約していたので、一般の生命保険料控除五万円の特約を見過してしまつたのです。この事が判明したのは「生命保険料控除証明書」が契約者あてに届いた時でしたので、保険会社と掛け合ったものの今年度は五万円の年

個人年金保険料が確定申告で控除できなくなつた!

金控除を受けられないことになつてしまつたのです。
保険等に頼んで契約内容の修正手続きをし、来年度からの適用が受けられるようになったのですが、保険契約書が返送されてきた時に特約をきちんとチェックしていればこんな事にならずに済んだはず。
個人年金保険については、①年金受取人が契約者またはその配偶者 ②年金受取人が被保険者と同じ ③保険料払込期間が三年以上 ④確定年金の開始日5歳以上かつ年金支払期間3年以上であることが控除条件ですから再確認をしてみてください。(保険F.P 山中三佐夫)

法の不知は許さず! ...とは云うけれど。

朝の9時半の約束だったのに、なんと1時間も前から事務所の前に着いて私の出社を待っていたという老夫婦。今日もまた問題を抱えた80歳前後の老夫婦が肩を丸め悲痛な表情で相談に来られた。

土地の借地権の問題だった。そもそも先週末のことだという。男性3人がやってきて、「この土地は、私が買ったので来年の2月末までに明け渡してほしい…」と突然云われたのだというのだ。何故なんだ。この土地は、私が兄から貰った土地なのに…。何故? 何故なの? 3日間というもの何も喉を通らない日が続いて今日の日が来たのだという。

特にこのようなパニック状態で混乱しているような場合は、話を余り急いで聴き出さないでたっぷり時間をかけることにしている。

老夫婦の話は昭和29年3月に遡って、両親のこと、兄弟のこと、連れあいと結婚したこと…から始まる。詳細は省くが、今年の春に亡くなった兄が、自分たちが今住んでいる土地を私たちにあげると書いてある書類にまで書いてくれているし、建物だって自分たちでお金を払って立てたのだし…と建築確認の書類を広げて見せてくれた。

生前、兄が老夫婦に土地をあげると書いた書類だといって見せてくれた。どう見ても、私にはその場を取り繕うように書いた「メモ書き」としか思えない文章だ。昭和60年頃に書いたもので、地番もなければ住所の表示もない。実兄が目の前で自ら書いたものだからキッチリ約束してくれたと信じていたし、登記のことなど何も考えていなかった…と云うのだ。それと、ずいぶん前に地代を払おうとしたら、あげたんだから地代なんか払わなくていいよ!と云われ。だから地代はまったく払っていなかったというのだ。兄が重病で入院した時には付き切りで看病したりした後だったので、本人達はなんの躊躇いもなく素直に喜んでその土地を貰ったというのだが…。

その実兄が死んだ。そして相続が発生した。自分たちが住んでいる土地の外に200坪余の土地が隣接している。相続税を払うために周辺の画地のすべてを売却したと云うことで、その土地の買受人が挨拶に来たようだ。あまりにも社会を知らなすぎる。兄弟の言葉を信じすぎる。法的な権利関係の手続きをなにもしていない。純粹だ。純真だ。でも社会に通用しないことばかりだし、どうしたらこの老夫婦を守ってあげられるだろうか。

真実は真実として告げる勇気が…。

何と切り出したらいいのだろうか。僅かな年金暮らしで慎ましく生活している老夫婦に出来ることを模索す

リスク・カウンセラー奮闘記

る。早速パソコンで登記簿を確認してみたが、建物は老夫婦の名で登記されているものの土地はまったく他人の名義になっていた。

登記簿をみても土地の所有権を主張するのは到底無理なことだ。借地権の主張ならギリギリできるのではないかと考えた。画地は4メートルの公道にまったく接していない。再建築が不可能な画地である。建物はすでに50年経ってかなり老朽化している状況だ。老夫婦が僅かな蓄えをすべて吐き出し所有権にこだわっても余り意味がないと考えた。不利な材料が次から次に出てくる。

現在住んでいる土地を借地であると仮定し、その評価方法について路線価図をもとに説明する。老主人は関心を示し始めしきりにメモを取り始める。ご自分達がおかれている状況が少しずつ理解できてきたようだ。

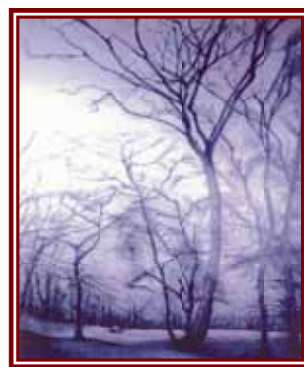
脇に座っている夫人はふっと悔しさが込み上げてきたようだ。それをご主人がたしなめる。夫人の悔しい思いは私が再び聞くことににする。このような状況の時には決して云いたい思いは遮らないことにしている。自分達が直面しているその問題点を自らが納得するための最後の吐き出しのように感じられるのだ。

感情の高まりが落ち着いてきたら、3人で少しずつ事実関係を整理し、真実を真実としてとらえそれぞれが納得してゆく時間が始まる。やがて、自分たちが「法に対して不知のまま過ごしてきた」ことに対しての反省の言葉がでてくるようになる。

自分達の問題は 次世代に送らないことを誓う

そもそもは実兄が亡くなったことによって吹き出した問題だったが「兄が亡くなる前にきちんとしておけば良かった」としみじみと語る。「過去を知らない甥たちを恨んだところで問題が解決するわけでもない。自分の想いは先生には全部聞いてもらえたからスッキリしました。」私たちが亡くなった後、従兄弟同士が憎み合っていることを思ったら悲しくなる。トラブル

は自分たちの代ですべてを解決しておきたいから…と、生き活きと艶のさわやかな顔になってキッパリと言ってくれました。気がついたら早朝から3時間以上も経過していて間もなくお昼になろうとしていた。どうやらお役に立てたようで、一日晴れ晴れとした気分が仕事でできた。こんな日はとっても嬉しい。



鉛筆画

小林慶子さんの作品



【ホロニック】

(英: Holonic) 全体(ホロス)と個(オン)の合成語。すなわち組織と個人が有機的に結びつき全体も個人も生かすような形態を言う。生物は個々の組織が自主的に活動すると同時に独自の機能を発揮する一方でそうした個が調和して全体を構成する (小学館「カタカナ語の事典」より)

R. F. C Information & Report

発行者 株式会社ホロニクス総研
責任者 代表取締役・リスクカウンセラー 細野孟士 DZC05310@nifty.com
〒113-0033 東京都文京区本郷1-35-12 かんだビル7階
Phone (03) 5684-0021 Fax. (03) 5684-0031
<http://homepagel.nifty.com/holonics/>